

## 第 30 回いたばし国際絵本翻訳大賞 イタリア語部門 講評

今回の課題絵本 *IMMAGINA UN POSTO* は、テレザが初めて小学校に登校する日の朝の、目覚めてから学校に着くまでが描かれた物語です。娘を送り出すパパと、わくわくどきどき、そしてちょっぴり緊張もしているだろうテレザとが交わす、なぞなぞのような会話がほほえましいですね。学校という場がこうあってほしいという親の側の祈りにも近い思いと、パパの絶妙なヒントからどンドンと想像がふくらんでいくテレザの期待感が、文章からも絵からもあふれ出ています。日本語に訳したときに、行間に漂っているそうした雰囲気や、この絵本の持つポジティブなエネルギーのようなものまですくいとりながら、訳していくようにしましょう。

子どもたちにもわかりやすいよう、明快な言葉やシンプルな表現を重ねながらイメージをふくらませていく作品ですので、文章自体は、文法書を片手に解きほぐさなければならないような難解さはなかったように思います。ただし、具体的になにかが起ころのではなく、対話を通して、頭のなかに次々と浮かぶイメージが描かれているので、訳文を読んだときに、きちんとそれが再現できているかが鍵となります。そのぶん、一語一語、丁寧に言葉を選ぶ必要があり、翻訳者の腕の見せどころともいえるでしょう。

原文の随所にちりばめられている、何気ない単語や表現から、学校へ行くテレザの喜びが伝わってきます。たとえば、冒頭の *un bel mattino di settembre* という表現。bel (bell) という形容詞の持つ寿ぎに満ちた語感を日本語に訳出せず、ただ「とある9月の朝」としてしまうのは、もったいないですね。「9がつのきもちのよいあるあさ」とか、「すがすがしい9月のある朝」など、素晴らしい一日を予見させる文章で、読者を物語の世界にいざなうようにしてください。

おなじく、5ページの *Ha preparato anche lo zainetto* という文章で用いられている、preparare という動詞からも、テレザが自分で前もってわくわくしながらリュックの中身を準備したことがわかります。「～が入ったリュック」と訳すのと、「～をつめこんだリュック」と訳すのとでは、文章からにじみ出る学校に対するテレザのわくわく感が異なりますね。

10ページの、*saltellando sulle mattonelle del marciapiede* という文章にも、テレザの喜びがあふれています。きっと、嬉しくて飛び跳ねるように歩いているのでしょう。大半の方が、「ぴょんぴょんとびはねがら」と訳していましたが、なかには、「スキップしながら」と訳した方もいました。このシーンにぴったりの意識だなと思います。ちなみに、mattonelle は、歩道などに敷き詰められたタイル状の石やレンガのことを指しています。「歩道の敷石」といった訳でいいでしょう。

もうひとつ、14ページの、*Teresa si ferma davanti a un cancello, dove un cane fa le feste abbaiando.* という文章をみてみましょう。fare festaとありますから、原文からは、この犬がテレザを見つけて、嬉しくて吠えているのだということがわかります。それと、ここで用いられている cancello ですが、伊和中辞典(小学館)に「鉄格子の扉」という語義が出ているためか、「鉄格子」という訳が目立ちました。ですが、cancello の前に、不定冠詞の un がついていますから、この門は、通学路沿いの家の門だということがわかります。ここの部分を、「鉄格子の前で犬がわんわん吠えている」と訳してしまうと、なんだか怖そうな番犬と、恐ろしげな建物をイメージしてしまいますよね。そうではなく、「テレザは、うれしそうにほえる犬がいる おうちのものまえて立ちどまりました。」(優秀賞)というように訳してあげると、読み手の頭のなかに原文に近いイメージが浮かぶのではないのでしょうか。

ところどころで用いられている再帰動詞にも注意が必要です。再帰代名詞(mi, ti, si, ci, vi)は、短いので見落としがちですが、原文の意味を正確に読み取るうえで、おろそかにはできません。Per oggi si è scelta (5ページ)は、「今日のために、テレザが(自分で)選んだ」という意味です。洋服

を主語にして「選ばれた」としたり、あるいはパパやママが選んだかのように、「選んでもらった」などとしてしまうと、テレザが自分の意思であれこれ考えながら服を選んでいる情景が抜け落ちてしまいます。同様に、18ページの *ti potrai asciugare e cambiare* ですが、*ti* がありますので、*asciugare* が、他動詞ではなく再帰動詞として用いられていることがわかります。つまり、「服をかわかす(他動詞)」のではなく、濡れてしまった「(自分の)体を拭く」という意味で用いられているのです。先に服を脱いで着替えないと、服は乾かせませんから、「服をかわかして、着替える」と訳すと、動きの順番が逆になってしまい、不自然ですね。

こうした、ひとつひとつは些細だけれども、おろそかにはできない訳語選びの積み重ねによって、物語全体のイメージができあがっていくのです。とはいえ、最初からそうした細かいニュアンスをもらさず拾いながら訳すのは難しいかもしれません。そんなときは、できあがった訳を、しばらく間をおいてから、再度、原文と照らし合わせて確認するといいでしょ。そして、原文を読んだときに頭に浮かぶイメージと、ご自分の訳を読んだときに浮かぶイメージが合っているか確認し、ずれがあったら修正する。そうした地道な作業を何度か繰り返すうちに、細かいところまで配慮のいきとどいた、練りあげられた訳文ができあがっていきます。

原文と照らし合わせての見直しがひととおり終わったら、次は原文を少し脇において、日本語の言葉の流れを確認してください。例えば、テレザがリュックにつめた *spada di legno*。全文を平仮名で訳している場合、「きのけん」と書いたときに、すぐに「木の剣」のことだとわかるでしょうか。それよりも、「きのつるぎ」や「きでできた かたな」のほうが、意味が伝わりやすいですね。絵とも見比べつつ、そうした文字の並びにも配慮しながら訳文を吟味するのです。そのとき、句読点などの記号の使い方も気にかけるようにしてください。イタリア語では、コロン(:)は、前の文章の説明を補足するなど、明確な役割を持つ記号です。ですが、日本語の文章においては通常は用いられませんから、そのまま使うと違和感が生じてしまいます。記号の意味を汲み取ったうえで、文章の流れのなかで表現するようにしましょう。

以下にいくつか、解釈の難しかった部分や、間違いの多かった箇所をあげておきます。

・2ページ *La strada per arrivarci è corta, ma ti porterà lontano.* ⇒ 「そこ(学校)にたどりつくための道は短いけれど、きみを遠くまで連れていってくれる」という意味です。

・5ページ *maglietta, zainetto, asinello* ⇒ *-etta, -etto, -ello* はいずれも接尾辞で、名詞に、「小さい」「かわいらしい」といったニュアンスを添えたいときに用いられます。ですが、*maglietta* は、*maglia* (セーター)の小さいもの、という意味から派生して、「T シャツ」という独立した名詞となっているのに対し、*zainetto* は、「リュックの小さめのやつ」という意味合いで *-etto* がついているだけなので、無理して訳出しなくても構いません。いっぽう、*asino* についている *-ello* は、このぬいぐるみに対してテレザが愛着を持っていることが表現されていると考えられるので、「お気に入りのロバ」などと訳すこともできますし、「ロバくん」というように、親しみのこもった呼び名風にしてもいいでしょう。このように、一見おなじような役割の接尾辞でも、ついている名詞やそれぞれの文脈によってニュアンスが変わってきますので、ケースバイケースでもっともふさわしい訳を考えていく必要があります。

・5ページ *la matita migliore, quella viola.* ⇒ 定冠詞 + *migliore* で、「いちばんいい」という最上級です。*quella* は、名詞 *matita* を繰り返さないために用いられていますので、「あのいちばんいい紫色の鉛筆」となります。

・9ページ *conosco gli alberi che lo circondano, uno per uno: li salutavo ogni mattina.* ⇒ *lo* は、*un posto* を指していますので、前半は「そこをとりかこむ木々の1本いっぽんを知っている」という意味です。*Colon(:)*は、前の文脈の説明を補足するために用いられていて、「どうしてか」と「ぐらゐの意味合いです。*li* は *gli alberi* を指していますから、「毎朝、木々に挨拶をしていたからね」となります。*salutare* を *saltare* と読み間違えた人も何人か見受けられました。

・10ページ *tante piantine di forme diverse, che vengono innaffiate e curate ogni giorno, finché mettono i fiori* ⇒ *piantine* は、「小さな植物」という意味です。世話をしているうちにようやく花が咲くのですから、ここでは「花」という訳語は使わないほうがいいでしょう。*vengono innaffiate e curate* は、どちらも *piantine* を主語とした受身形で、「水やりをしてもらい、世話をしてもらおう」という意味です。「水やりをして、手入れをされる」などと、主語と目的語を前後で入れ替えてしまうと、文意が伝わりにくい訳文になってしまうので、注意が必要です。「いろいろな形のたくさんの植物たちが、花ひらくまで毎日水をもらって、だいじにお世話してもらうんだ。」(特別賞)

・10ページ *ogni fiore è una sorpresa* ⇒ 直訳すると、「花のひとつひとつがおどろきだ」となります。この *sorpresa* は、「どんな花が咲くかわからない」という意味と、「想像もしてなかった美しい花を咲かせる」という意味の両方がこめられていますので、どちらの訳でもいいでしょう。「どんな花がさくかは、そのときのお楽しみだよ」(特別賞)、「どの はなも びっくりするほど すてきなんだ」(特別賞)など、皆さんそれぞれに訳を工夫してくださいました。

・14ページ *un posto pieno di strumenti musicali che suonano ognuno per conto proprio* ⇒ *che* 以下の動詞、*suonano* は、*strumenti musicali* を主語としています。絵を見るとわかるように、楽器が自分たちで音を奏でているイメージですね。*ognuno per conto proprio* は、「それぞれ(の楽器)が気ままに」という意味です。「へやいっぱい楽器たちが、みんな好きかってに音をならして」(特別賞)といった感じに訳せるといいでしょう。

・14ページ *a volte rimangono anche zitti ad ascoltare cosa racconta il silenzio* ⇒ 直訳すると、「ときには黙って、沈黙がなにを語っているかに耳を傾けることもある」となります。*cosa racconta il silenzio* は、*il silenzio* が主語なので、「沈黙がなにを語るか」という意味です。「じっと だまって、しずけさが かたりかける ことに みみを すましている ときも あるよ」(最優秀翻訳大賞)のように訳すと、イメージが湧きやすいですね。

・16ページ *si creano vite dal nulla* ⇒ *vita* には、「生命」「人生」「生活」など、いろいろな意味がありますが、このページでは宇宙のイメージが語られているので、「生命」や「いのち」と解釈するのが妥当だと思います。「なにもないところから、命が生まれる」。

・16ページ *si disegnano mappe preziose da conservare per sempre* ⇒ *da* + 動詞の不定詞で、「～すべき」という意味ですので、「永遠に保存されるべき」という意味です。「永久保存版の地図」と訳してくださった方もいました。「ずっと まもりつづけ なくちゃ いけない かけがえのない ちずが えがかれるんだ」(最優秀翻訳大賞)。

・18 ページ *fa da riparo non solo a te, ma anche a tutti gli altri bambini* ⇒ *fare da riparo* は、「避難場所の役割を果たす」という意味ですので、直訳すると、「テレーザにとってだけでなく、ほかの子たちにとっても、避難場所(雨宿りのできる場所)の役割を果たす」という意味になります。

・21 ページ *e imparerai a chiamarli per nome... come i tuoi amici!* ⇒ *chiamare* のあとに、男性複数形の代名詞 *li* がありますから、「それ(=*nuovi sapori*)を、名前で呼ぶ」という意味です。そして、*come i tuoi amici* は、「友だちを名前で呼ぶのと同様に」ということ。意味が伝わりやすいように、少し言葉を補いながら、意識してあげる必要があるでしょう。「なんて なまえかは おそわればいい。おともだちに なまえを きくようにね！」(特別賞)。「友だちみたいに名前でよべるようになるんだよ！」といった訳ですと、「友だちみたいに」の部分が、「お友だちもそう呼んでみたいに」と解釈できてしまうので、注意が必要です。

今回の課題テキストは、誰もが通った経験のある「学校」をテーマにしていたので、訳しながら、皆さんの小学校時代の思い出ですとか、お子さんを学校に通わせていたときの思い出がよみがえったり、あるいは、まさにいま学校に通っているお子さんがいらっしゃる方の場合には、学校へのいろいろな思いが胸のなかでうずまいたりしたのではないのでしょうか。翻訳は音楽の演奏にも似ていて、そうした訳し手の胸のうちの思いと、原著者が本に込めた思いとが共鳴したとき、思いがけず美しい調べを奏でるものです。

翻訳の腕を磨くためには、必ずしもその国に行く必要はありません。皆さんの日常の経験も、ご自身のなかにある共鳴箱を研ぎ澄ますこやしになります。さらに、日ごろから美しい文章にたくさん触れることによって、日本語の奏法が身につく、耳も訓練され、原著者との美しいハーモニーを響かせることができるようになるでしょう。そんな、とても身近なところにあるけれども、遠くまで連れていってくれる翻訳の世界で、存分に楽しみながら、皆さんにしか奏でられない調べを見つけてください。

イタリア語部門 審査員 関口英子